

スクールカウンセリングにおける箱庭療法

藤元直服*・菅原正和**・森 範行***

(2008年3月3日受理)

Chihoku FUJIMOTO, Masakazu SUGAWARA and Noriyuki MORI

Miniature-garden Psychotherapy in the Junior High School

I スクールカウンセラーと教員との連携

Maslow, A.H. (1970) の古典的な「人間の欲求階層説 (theory of human needs in a pyramidal)」によると、人間の基本的欲求である生理的欲求と安全欲求が充足されると次の大きな課題は、所属の欲求であるという。現代の我が国の子ども達はこの段階で悩み苦しんでおり問題行動は尽きることがない。一般には中学校においても教育相談室で待っているだけで、次々と相談が持ち込まれると想像されている。ところが、学校により多少の差異はあるものの、今までの調査結果では、相談室に対して、「心を覗かれる」と誤解を持っていたり、「病気の人が行くところ」といった暗いイメージを持っていたりする生徒が多い。身体的不調の際に病院へ行くことが日常的であるのに対し、精神的な不調の際にカウンセリングを受けることは、まだまだ非日常的、否定的に見られている。生徒、保護者においてこの傾向が強いが、生徒のことを相談するのは教師としてのプライドにかかわると考えておられる一部の教員を除いて、おおかたの教員はカウンセラーに対して最近では協力的になってきている。相談室に対して偏見に捕らわれていても、問題が深刻かつ切羽詰った状況に陥った場合には、やはり支援を求める。

[支援活動]：必要事項（タイトル・開室日時・場所・カウンセラー氏名・電話番号）以外に視点変革の内容文を添え、生徒や地域住民のカウンセリングに対する捉え方が変わることを目指した。「心の病」ではなく「生活の歪み」・「行動の問題点」を相談するという視点を持ってもらう。間違った行動パターンを学習してしまったために生じる問題には、正しい行動パターンの学習をやり直せばよいという行動主義の考えは、新たな視点の提供に最適である。

[教科担任への協力依頼]：実際に、教員に生徒役をしてもらい、授業雰囲気、教示の方法、質問に対する態度、必要事項の記入などを知ってもらった。家の絵、家族画などの中から相談の上、樹木画を全校生徒に描かせてもらった。得られた描画は、精神状態のチェックに用い、気になる生徒については担任に様子を確認した。また、新たに相談に来た生徒の概略を把握するために使っている。

- (1) 出欠席チェック—全生徒の氏名ファイルをもらい、それに1週間ごとの欠席日数を記入。これによって生徒一人一人のおおよその出欠席が把握できる。恒常的な不登校生徒、不登校傾向の生徒、身体的健康上の理由で欠席の多い生徒などが判る。特に、新たに不登校に陥る生徒の前兆としての欠席日数の増加を把握可能。

- (2) 養護教諭・クラス担任からの情報収集と面談後の情報共有—新たな赴任校である場合は特に、最初の情報収集は欠かせない。
- (3) 出欠席チェックで把握した個々の生徒の欠席理由を複数の先生から聞くことで、対応方針を決められる。また、欠席はしないが問題を抱えている生徒についての情報が得られる。
- (4) 以下に記す事例において、面談後、心の教室相談員の方々と情報交換し、必要なときはクラス担任に面談で得た情報を伝え、意見交換の後、これからの対応における基本姿勢を明確にした。
- (5) その他：相談室前に白板を設置し、日々の予約、面談中か否か等が判るよう予約票を通信ボックスの下にぶら下げ、誰に知られることもなく記入できる。カウンセラー出校日をカレンダーに記入し、相談室前に掲示。小学校にも相談カレンダー等を配布。相談室を明るく広くし、できる限りオープンにした。

II 事例研究（多くの事例の中から次の11例の概要を記載）

- (1) 3年女子A（箱庭A 7, A11）、主訴：対人不安
Aは同じクラスの気の強い女子との人間関係に悩む。面談中Aは視線を避け、不安の多い様子。箱庭A 1を作る。印象深い夢（①, ②）も話す。箱庭は目標を見通した明確なもの。「君には物事がかなりよく判っているんだね」と言うと、「そうかな」と言いながら、にっこりする。ラポールができ、1時間で切る。（時間については、はじめに話しておいた）次回の来談を促す。2回目、夢（③）を記録してくる。問題は対人関係ばかりでなく、家庭内の人間関係および、経済的問題があった。修学旅行前の経済問題については担任に連絡し、市の援助を受けられる方向で最終的に決着した。途中、生徒のプライドや家族間のやり取りで紆余曲折はあった。3回目（夢④）以降、自我の自立の問題も絡みだしたが、家庭が安定を取り戻すにつれて、Aの不安も少なくなり、3ヶ月で一応終結した。
- (2) 3年男子B、主訴：教室内孤立。かつての親友との関係が薄れ、教室・クラブ内で対立している。Bはプライド高く喧嘩早い。学校内での生活態度よくなく、怠惰。
一方、家庭内問題が大きく両親の離婚後、父と生活している。父はBを放任、近々再婚予定。以前の再婚相手がBを虐待したため、今度の相手にもBは大きな不安を持つ。父の命令でクラブに参加するが、喧嘩し、教室にも入れなくなる。5回面談。保健室登校中。
- (3) 3年男子Cの母親、主訴：Cのひきこもり。
2年の終わりに市内の他の中学から転校してきたが、なじめず不登校。以前の中学の友達とは遊び、生活も不規則。母親はひきこもりを心配するが、話を聞くうちに、怠惰と基本的生活習慣の未確立・非行の心配もする。離婚した父が本人に携帯電話を持たせ、金もやっている。カウンセラーが母親の了解のもとに、本人と電話で話そうとするが、出ない。父親とカウンセラーとの接触を母親が嫌う。バイク窃盗で警察からの呼び出しあり、生徒指導主事に指導依頼。母親との面談3回のみ。
- (4) 1年男子D（箱庭D 1, D 7, D13）と母親、主訴：いじめ、母親主訴：対人関係におけるDの発達遅滞。DのWISCⅢは、言語性IQが100、動作性IQは76。Dはプライド高く、級友のからかい、いじめに我慢ならない。「いろいろな人間がいること、君に落ち度はないこと、良くないことは良くないとはっきり相手に話そう、担任の先生にクラス全体に注意してもらおう」と話す。母親は現状把握が正確で、非常に適切な対応をしている。子供がしっかりしている点、優れている点を強調し、母親の精神的不安を和らげることに専心した。「子供の発達はさまざま、早い子も遅い子もある。けっして発達が止まっているのではないから、現在の対応を続け、見守ってください」と話す。生徒の箱庭で監視カメラが頻繁に出てくるので、母親に尋ね

る。「少し甘えさせてはどうでしょう」と話す。4回で終結。時折、生徒と立ち話をするが、級友の態度を許容できるようになってきている。

- (5) 1年女子Eの母親、主訴：不登校。Eは入学当初の緊張がなくなるにつれて、活動レベルが低下し、不登校になった。強迫神経症的な朝の行動パターンが出発を遅らせ、登校できない気分にする。その後、うつ的な睡眠に入る。心的内外の圧力がなくなる夕方から活動レベルが上がり、家事を手伝ったり自宅学習をしたりして、翌朝の登校を家族に約束する。この繰り返しが初回面接当時から1ヶ月続いた。面接は初回から母親のみ。その後、母親へのカウンセリングを通し、非秩序性・不完全性の価値を積極的に家庭内に取り入れてもらい、意識化するように依頼した。なぜなら、両親は非常に几帳面で能力が高く、兄も優秀。ところが、Eは平均的。Eの朝の儀式的行動パターンからの開放と心的エネルギーの蓄積を願って依頼した。また、Eの夢や描画の採録を依頼したが、母親のこれらに対する疑問をそれとなく感じる。継続中。

- (6) 1年男子F（箱庭F1）と母親、主訴：不登校、母親主訴：怠学

樹木画（F1）を見て、気になった生徒である。樹木画は、3本を三つ編みにしたような幹の観葉植物を描いたもの。幹のより合わさっている意味は、自我に2つ以上の力の拮抗があるようだ。Fの自己主張の自我と、周囲の主張の超自我とが葛藤していることを示している。初回は母親と面談。別居の祖父が支配的な家庭で、祖父から父への小遣いが家計の支え。父の稼ぎはパチンコに消える。祖父の家系は自己主張の強い家系。父の兄は22歳で自殺。父親は子供のことに無関心で専制君主的。祖父はFに対し甘く、物を買って与える。母親は働いているようだが、格好は派手。母親は社交的な顔と苛立ちから逃れたい陰湿な顔の二面を使い分けているよう。母親が疲れている様子なので、「長い目で見て行きましょう。一人で何もかも背負おうとせず、おじいさんやお父さんの責任に当たると

ころは放っておいて、まず、お母さんが元気になりましょう」と、話す。母親と3回。Fと5回面談。父親に無理やり連れられ、Fが保健室登校をはじめた翌日、相談室に来る。小説のあらすじの説明を通して、ラポールができる。自己主張が強く、能力もプライドも高い。さらに4日後、父親の親戚（Fによれば父のパチンコ友達？）と母親がFを強引に教室に入れようと意気込んで来校する。が、学年主任に説得されて帰る。Fの周囲では不登校の原因は、Fの怠けでしかないと思っていることが判る。ここでも父親は責任を担おうとしていない。そればかりか、教室にFを先生方はなぜ入れないのかと疑問に思っている。こうした周囲の催促により、Fはせっかく溜まったエネルギーを失い、教室に入ることが延期になった。Fに対する周囲の関心が高まることで、母親は元気になりつつある。それに伴ないFはかなり元気になりつつある。少しはコンフィグレーション（Configuration）が動いている。相談室登校で継続中。

- (7) 1年男子Gの祖母、主訴：Gの問題行動

Gの両親は離婚。母親の実家に母親と子供2人が世話になる。母親はある日、家出。祖父母が孫たちをかわいそうに思い、この5年、市から経済的援助を受けながら育ててきた。最近、Gは携帯電話を欲しがり、注意すると物にあたったり、悪態をついたりする。Gの行動がエスカレートして、暴力をふるったりしないかと祖母は心配。また、毎日いやな気持ちでやりあうのに疲れた。学校で生徒全員に厳しく注意して欲しいと電話での相談。祖母は携帯電話が、母親恋しさの表れであることに3回目に気づき、買ってやって穏やかな生活に戻りたいと言った。が、電話代のこと、電話の次は別の物を要求してくる可能性のことを話し、Gのためにならないことや経済的な状況を話すよう毎回、促した。祖母の心労に共感し、立派に育てておられると現状の方向性を肯定した。祖父に父親的な厳しさを与えてもらえないかとも尋ねた。その後、祖父に叱られ、伯母に注意されて何とか落ち着

きを取り戻したと3回目に話している。ただ、夏休みの間、心配だと言われ、市の教育相談室の電話番号を教えた。父性の欠如による欲求の暴走あり。

(8) 3年男子H、主訴：不登校傾向

欠席日数が増加傾向にあるため、理由を聞くとしてこちらから呼び出した。旧担任によると昨年度以前も欠席が多く、注意しても聞く生徒でなく完全な怠学傾向の生徒であると。

Hの話では、Hが小学3年生のとき、激しい夫婦喧嘩の末、別居。つい最近離婚した。非常に辛い日々を延々と過ごし、感情を遮断した口調で、他人事のように自分の状況を話した。学校という枠を通り越して、人間としての生存にかかわるレベルに立つ経験を持ったようであった。将来展望を聞き、Hなりの考えがあることを確認した。学校教育の枠を知っていながら、その中にとどまる必然を持ち合わせていない生徒である。「もし、相談しようと思ったらまた来なさい」と言って帰した。

(9) 3年女子I、主訴：進路不安

保健室登校の生徒。3年間で欠席日数が多く、保健室登校がほとんどであった。高校に進学できるだろうか、進学できても登校できるだろうか、と相談に来た。話す内に、現在の友人関係についての対人不安も訴えた。保健室登校時に何度か話し、相互関係はよかったし、樹木画も前回描かせてあった。高校入試のおおよその現状と高校生活のルールとを話し、Iの客観的現状を肯定的に評価して話した。友人との人間関係については、勇気を出して気持ちを伝えてはどうか、人間関係には意思的に疎遠になる場合と、自然に疎遠になる場合があるからと例を交えて話した。養護教諭の話しによると、時折、教室の授業に出ているとのことであった。

(10) 1年男子J(箱庭J1)、主訴：授業中の発声

担任からの依頼で面談した。教室内で奇声を発し、注意するとニタニタと甘えてくる。親しくない人が注意すると行動が固定し動かなくなる。両親は子供に対し冷たく、暴力もふるう。

初回は約40分、面談と箱庭をさせた。受け答えは緊張していて声は小さいながら、しっかりできた。境界例的前兆は感じられなかった。しかし、これからの対人的経験によっては、その可能性もある。両親からの暴力に対する恐怖と、両親への甘えたい願望の曲がった両立が感じられた。つまり、暴力や叱責に対し固まり、厳しい刺激の流入を防ぐ。他方、暴力をふるった当人との関係が途絶えるのを恐れる場合、幼児的対応で甘えていく。それによって、暴力的攻撃が収まることを経験的に知っているのであろう。K・ローレンツのいう「攻撃本能の動物的回避行動」そのものである。対人関係のペルソナが未発達で、幼児期のままで止まっているものもあり、歪んでいる。これからの人間関係はなかなか大変であろうし、注意して見守っていかねばならない。

(11) 教育実習生女子K(箱庭K1)、教育分析

教育実習の最後に挨拶に来て、心理学やシンボルについて聞いてきた。箱庭を作ってもらいその分析を通し、教育実習の心的影響や将来について、箱庭の中に無意識が語る内容を意識化した。

Ⅲ 相談室運営上の問題点とこれからの課題

(1) 事例によっては、相談室が不登校生徒の登校場所になる。その場合、一日中、生徒が在室し、電話相談の受け答えが聞こえてしまう。夢の記録や描画が診断に使われることを知られ、その生徒に対する診断手段が著しく減少する。また臨時の来談者に対する対応場所の確保が難しくなる。

(2) 一斉教育には指導・促しが多かれ少なかれ内在する。カウンセリングには、生徒が自ら動き出すのを待つ姿勢がある。この2つ、促しと待ちとが学校組織内で拮抗しがちである。

(3) N地域は、一部が新興住宅地へと変化している農村で、地域内で地区間の相互交流のある無しの観点から、いくつかの地区に分割されてい

る。それぞれの地区を擬人化してみると、集団主義的な地域自我と個人主義的な自立自我とが、全体的には混在していると見ることができる。こうした背景の中で育った中学生には、集団からの阻害を起因にする神経症的な症状が出やすい一方、放任的養育環境に育つ生徒もあり、怠学傾向、退行による甘えなども、症状として出やすい。また、学校は、学校という組織的特長により、地域全体より集団主義的傾向が強い。集団行動の尊重や規則厳守が守られてはじめて個人的能力の自由度は認められると多くの場合考えられる。これらのため、以下の4症状が発症しやすい。

- ① いじめ、その反対の退行と甘え：集団主義埋没型の自我の諸症状。
- ② うつ病的な不登校：学校や家庭が理想とする完全性と生徒の個人能力との不釣り合いによる挫折。その後のうつ、強迫的行動の出現（儀式化）。個人主義的自我の未発達およびその自我が周囲から否定されることによる神経症的な症状。
- ③ 対人恐怖：自らの中の、個人主義的自我の芽生えと集団からの分離不安の葛藤。
- ④ 退学傾向の不登校：個人主義的自我の暴走
これらに対し、組織的に取り組む必要がある。たとえば各教科において対強迫性に対し、国語・道徳の時間に、完璧主義を貫いて失敗した童話や昔話を取り入れる。家庭の時間に、掃除や料理で完璧でないことのよさを教えるなど。

対人不安に対し、上記の教科以外に、社会科で多様性の意義や差異の尊重を取り入れる。また、個人と集団の相互関係の理解、および概念の内面化。

- (2) 組織作り（仮称：カウンセリング委員会）
メンバー：学年主任、生徒指導主任、養護教諭、心の教室相談員、カウンセラー。
内容：生徒の情報交換、月に1回か2回。
- (3) 生徒支援は、保護者・教員・心の教室相談員・養護教諭・カウンセラー・県や市の相談施設・警察など、幾重にもなっている。それぞれ

が主として分担する人格的ヒエラルキーを明確にすると共に、オーバーラップしている場合の情報交換や協同性を組織化・活性化していかなければならない。特に、学校内での協力、学校職員と保護者との意思疎通は活発に行わなければならない。たとえば、事例(6)では、誤解が生じたようだった。

カウンセラーとしての資質向上に、あらゆる機会を捉えて努めたい。

- (4) 中学生はカウンセラーに苦しい状況を打破する即効性の情報（医者や妙薬のようなもの）を期待し、訪れるケースが多い。この他力主義の流行を是正することはできないものか。
- (5) 相談室の入口および内部を飾り、プレイルーム・相談室・休憩室の3つの機能をもつようにしたい。現状では、面談中に遊び半分の生徒が平気で入ってきて、雰囲気壊すばかりか、他人の視線を避けたい生徒を興味半分で眺める事態が生じてしまっている。そうした遊び半分の生徒を注意すると、相談室はかた苦しいところという評判が立ってしまう。逆に、生徒と遊びながら治療する Play therapy が中学1、2年生ではまだまだ有効である。そうした厳粛な遊び場にもしたい。

IV 夢・分析

相談内容を深め、より正確に理解するために、夢をよく用いる。中学生はまだ、客観的な言語表現が十分でなく、夢の内容を正確に伝えられないケースが多い中、以下に、明確で分析に耐え得たものを記す。

(1) 事例1のAの夢

- ① 平成13年5月：何人かの同じ年ぐらいの男の子と重久里（友人）と私とでボートに乗ってある島（南の島っぽい）に行った。みんな泥だらけで疲れた顔をしていた。兵隊みたいな服を着ていた。島に到着すると、鉄砲の弾が私たちの方に飛んできた。私たちは弾が飛んでくる方角に向かって鉄砲を撃ちまくった。

そしたら大きな声がして、10人位の兵士が飛び出してきた。戦争みたいに戦っていた。私たちに「撤収！」って叫んでいる人がいて、その人に向かって、私と3人ぐらいの味方が壕に飛び込んだ。飛び込んだ瞬間、AGがどこにいるのか心配になって、壕の中から思いつき大きな声で名前を呼んだ。すると、呼んだのが聞こえたのか、AGがこっちに向かって走ってきた。壕まであと少しの所で、AGに何か物が当たり、炎が一面に広がった。私がAGのところまで走っていったら、AGは死んでいた。

[夢を見た頃の状況]：AGは中学1、2年のとき一緒にクラスだった仲のいい友人。甘えん坊で、夢を見た本人Aと似ている中学2年生。当時、Aはクラスで嫌われている感じを受け、孤立していた。

[分析]

1年近くたってもこの夢を明確に覚えているとは、Aにとってかなり強烈な印象を残した夢、つまり、内界のInitiation的夢であろう。Aにとっての教室は言葉の弾が飛び交い、それに当たれば心は血を流す戦いが繰り広げられていたのだろう。が、それはAの内界の投影でもあろう。Aの無意識に浮かんだ島(自我)では、激しい戦いが繰り広げられていた。AGはAと似た甘えん坊、つまり、Aの幼い心を、男の子はAの影を、A自身は自我そのものを象徴しているようだ。みんな無意識を引きずっているようで泥だらけだ。超自我が撤収と叫ぶ。が、Aの幼さは死んでしまう。

Aにとって、教室でわがままは通らないことを痛感した経験を象徴的に伝えている夢である。一段階成長した貴重なInitiationの体験である。

- ② 平成14年4月12日(最近見た夢)：熱帯雨林の淀んだ、濁った、広い川を外人の男の人とボートに乗って目的地に向かっていく。川岸を少し歩くと開けた町があり、そこにKOD2と看板が見える。KOD2に行かなければ

ならないと思っている。ほんとの目的地は別にあるのだが。コンクリートの低い塀の家があり、そこから蛇が出てくる。男の人はすでに消えていない。お母さんがいて、蛇のことを私が聞くと、「お母さんが飼っている蛇だよ。」と。蛇を払いのけると指を噛まれる。保健の先生が薬を塗ってくれて夢が終わる。
[夢を見た頃の状況]：初回の面接で上記①、②の夢を語る。事例(1)参照。

[分析]

KOD2とは、学校近くのホームセンター「ケーヨーD2」のこと。ほんとの目的地とは学校のような(夢③より)。塀が低く誰でも入れる家(学校?)に蛇がいる。蛇は、母親は持っているが保健の先生は持っていないNegative面の象徴。童話的に言えば、魔女的な側面。保健の先生はAにとって、いたわりを与えてくれる人。外人の男の人はアニムス的。アニムスの影と共に無意識を渡り、自我の確立に向かっている。その自我はどこからでも入れ、蛇のような面も入り込んでいる。Negativeな側面の扱いに困り否定しようとするが逆にやられる。保健の先生がそれを直してくれる。

学校での戦いの中に、母親が持っていると同じようないやな側面を発見した驚きを伝えている夢。

- ③ 平成14年4月13日：夕方、一人で知らない町をさまよっていた。駅に着いた。駅は小さくて、その横にきっぷ売り場とお店が合体したところがあった。どこに行くのかわからないけれど、目的地があって、そこに行くための切符を買った。切符売り場のおじさんは無愛想で怖そうだった。ホームで電車を待っていたときは暗くてさびしかった。いくら待っても電車が来ないからボーとしていたら、目的を思い出した。目的は「学校に行って教科書を届けること」。はっとして歩き出したら学校に着いていた。学校は真っ暗で怖かった。
[夢を見た頃の状況]：初回面接の翌朝の夢。

[分析]

一人でどうしたらいいかわからず迷っていた。小さな相談室に着いて、目的地への暗示（切符）を手に入れた。カウンセラーは無愛想だった。Aはカウンセラーに、医者が処方する薬のような教示を期待したのだが、カウンセラーはそうしたものを示さなかった。我に返ると、目的ははっきりし、歩き出した。学校は規則性の高い世界。教科書は理性的世界。共に自我の確立になくなくてはならないもの。だが、Aの自我はまだ自我らしい機能はしていない。カウンセラーの印象とAの状況を表した夢。

- ④ 平成14年4月17日：ホテルのような所でゲームに参加している。3日間続く殺し合いのゲームで、生き残った人は次のゲームに参加しなければならない。同じくらいの年齢の男女数人で、みんな恐そう。周りのみんなは、1回は死んでいるゾンビみたい。道具として、短剣・厚い本（聖書のように）・水（希望）がみんなに与えられる。殺す手段は短剣と素手。夜は部屋にいて、寝るに寝られない。朝、学校に行く。帰ってくるとまたいつ殺されるかわからない。あと1日になる。そこで終わり。この夢は初めて見たにもかかわらず、2回目の夢。

[夢を見た頃の状況]：面談の話題が、深い点になりつつある頃。

[分析]：殺し合いのゲームは、外界ではテニスの試合のようだ。内的には、多くの自己主張がぶつかり合い、殺し合いに感じるほどすさまじい。聖書のような厚い本で理性を築き上げ、無意識からのエネルギー（水）を得て、生きていける。

V 箱庭・分析

箱庭をクライアントが作ったときは、デジタルカメラで1つの箱庭に対し約6枚の写真（真上から、主側面、右側面、向かい側から、左側面、主

人公）を記録用として撮った。遊びで作った箱庭、恋の悩み等で来た生徒の箱庭、および、他の1ケースは省く。以下に11回の箱庭を撮った計60枚の写真の内、各1枚ずつを分析と共に記す。

- (1) 事例(1)：Aの1回目、インテーク時。箱庭A 1～6
- (2) 事例(1)：Aの2回目。箱庭A 7～10
- (3) 事例(1)：Aの3回目、終結時。箱庭A 11～16
- (4) 事例(4)：Dの1回目、インテーク時。箱庭D 1～6
- (5) 事例(4)：Dの2回目。箱庭D 7～12
- (6) 事例(4)：Dの3回目。箱庭D 13～19
- (7) 事例(6)：Fの1回目、インテーク時。箱庭F 1～5
- (8) 事例(10)：Jの1回目、インテーク時。箱庭J 1～6
- (9) 事例(11)：Kの箱庭。K 1～6
- (10) 教員Lの箱庭。L 1～3
- (11) ダウン症傾向の生徒Mの箱庭。M 1～5

- (1) A 1



S中学3年生女子、Aの1回目、2002年4月12日、事例(1)。

Aは魔女の前の女の子、魔女はAのお母さん。毒入りリングを持ち、女の子に寄りかかっている（Aの説明）が、Aを守っているようにも見える。犬2匹を味方に戦いの体勢。はるか前方に目的の丘がある。それは花や宝石のある素敵なお場所。その前にいる男の子は、目的のひとつか妨害する敵

か不明。左下のマリア像はAの避難場所で、保健の先生のイメージ。一方通行の標識どおり、退行も妥協もできないAは、わずかな味方と共に戦って行く気構えでいる。知的で、はるか先の目標をよく見抜いている。

(2) A 7



Aの2回目、2002年4月19日、3回目の面談時に制作。視線が安定し、エネルギー的には心配ない。Aは母親から離れ、一人で修学旅行に向けて川を渡ろうとしている。やはり、一方通行の標識。左上の自宅から離れ、右の東京へ行こうとしている。右上が上野動物園、右下が浅草。右の楽しい、にぎやかな世界と左の殺風景な世界の対比。Aの心はこんな風に感じているのだ。ワニが出てきて、左の無意識と右の意識とをつなぐ働きをしているようだ。まだ、ワニの姿なので肯定的ではないが、橋はかかっている。修学旅行に向けての渡河は、実は意識化つまり、自我確立の渡河でもある。

(3) A 11

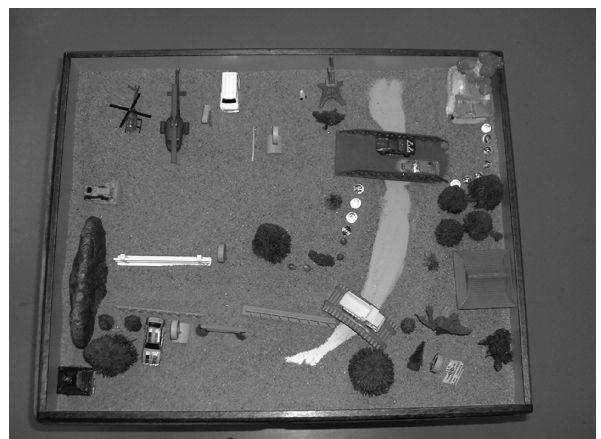


Aの3回目、2002年7月12日、面談8回目、左上の自宅近くに木の実が落ち、Aの家庭にそれなりの収穫(収入)があったことが伺える。同時に、Aの自我が何らかの実りを獲得したことをも示す。

左下の憩いの場所と右上にある魔女の家の対比。戦いはないが、まだ、両方の要素は存在する。Aは右下にある池の中の鳥が自分だと言った。囲われていると。しかし、池の周りでは子供が遊び、穏やかな雰囲気。Aは水鳥になって、無意識と意識の両方の世界を行き来できる。まだ、囲いがあって囚われているが。

カウンセリングは一応の終結と考えられる。

(4) D 1



S中学1年生男子、Dの1回目、2002年6月4日。事例(4)。右上がDの自宅、本人と母親は自宅内にいる。中央上の鉄塔はレーダーなどの電波塔。左のヘリコプター2機は戦闘機と偵察機。基地には整備用のブルドーザーもある。左下の岩は恐竜

の背中。五重の塔は学校。右下は古い日本。人物像なし。

この箱庭は、Dの説明によれば、4つの部分、右上の自我、左下の超自我、右下の穏やかな過去の記憶、左上の現在の戦い、を表すと考えられる。超自我との境の堀・川によって各部分は分けられているが、橋の上を車が行きかうように、十分つながっている。戦闘機や恐竜の背中など、攻撃性とエネルギーは高い。全体をサーチライトとレーダーで監視しようとしている。生物は見当たらず、嵐の前の静けさという感じ。

Dは、自己の内面を見る能力を十分持っている。

(5) D 7



Dの2回目。2002年6月14日。1回目比べて無意識部分が広くなり、戦闘も激しい。戦闘機は実際に飛んでいる。本人は左上の五重の塔にいる。また、左上は古い日本。右の動物園には、通行止めの標識と蛇とで入れない。

攻撃性は前回より激しいが、自我との境界の水辺で通行止めになり、無意識に抑圧されている。攻撃性は攻撃の対象を把握していないために、適切な解消ができないでいるようでもある。前回より動物が出現して、生気に満ちているし、亀が出てきて渡河のイメージもある。動物は水を飲み、橋を渡っている。エネルギーの取り込みと流通が感じられる。

(6) D13



Dの3回目、2002年6月25日。上半分は動物園。中央に大仏が首まで砂の中に埋まっている。大仏は監視カメラとの説明。

戦闘は治まり、穏やかな箱庭になった。禁止事項の標識がなく垣根も開いている。橋の下を高圧電線が走り、下部の無意識から上部の自我へ、エネルギーが確実に流れている。中央の監視カメラは、小さなマンダラのようにあり、心全体のバランスを保つために目を光らせているようだ。カウンセリングは一応終結。

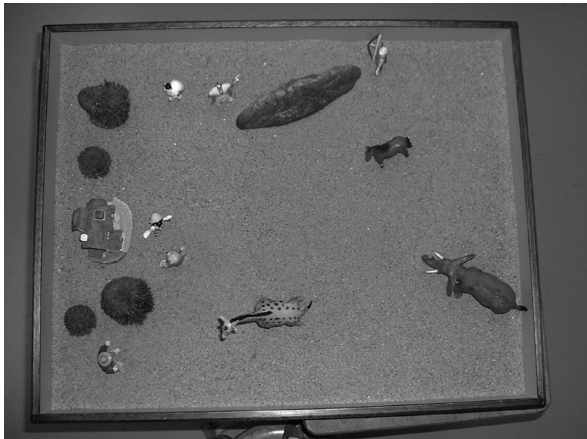
(7) F 1



S中学1年生男子、Fの1回目。2002年7月5日。事例(6)。家を中心に4つの花、4本の木。左右対称性など、マンダラである。両親ともそれぞれが自分勝手でありながら、本人の自己主張が肝心のところで認められない家庭。それに対する反発を、Fは不登校という形で表現している。しかし、Fに力はなく、不登校を父に叱られ、殴られ

て無理やり登校させられたが、教室には入れず、八方ふさがりの状況。周囲の理不尽さに比して、Fの品位の高さ、知的振る舞いなど、マンダラが出現するアレンジがある。両親が家庭の歪みに気付くにはかなり時間がかかりそうだ。

(8) J 1



S 中学 1 年生男子、J の 1 回目。2002 年 7 月 19 日。事例(10)。

本人は中央左の少年、熊と話している。熊が自慢話をしている。手に持っている蜂蜜はおいしいなどと。左下の人物はきこり。右上は狩人。岩山を挟んで、この土地の族長と旅人。旅人は左奥へ行こうとしている。J にはこの箱庭の左の枠よりさらに左のイメージがあった。少し危険。初回で緊張しているが、枠をはみ出して思考する場合、自己制御能力があるとき以外、要注意である。箱庭全体は、文明化(意識化)していない世界(心)を示し、無意識と自我の区別や力関係などが希薄である。1 回だけでわかり難いが、動物や登場人物に比して、内容がない。きこり以外、左や下の方向性を持ち、退行性を感じる。家が左端にあることも、無意識の中に埋没していることを示している。動物の方向性からもエネルギーの内向性が伺える。

(9) K 1

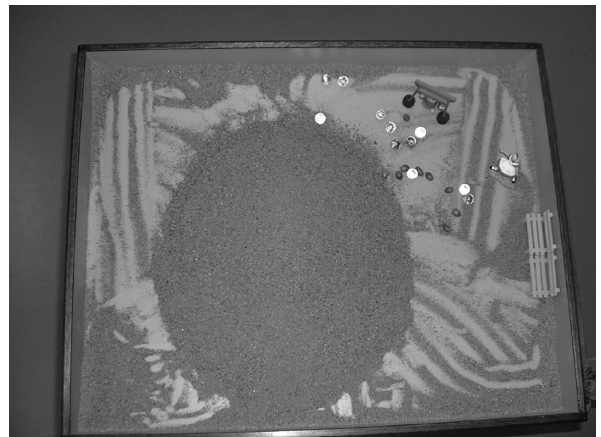


教育実習生女性 K の 1 回目、2002 年 6 月 7 日。事例(11)。

養護教諭と共に最後の挨拶に来て、心理学の話から箱庭を作ってみるとなった。左牧場、牧場入り口に立つ牧場主が本人。働いた後の帰宅。中央が母屋。その左はサイロ、右上は別棟。

この日は教育実習最終日。牧場(学校現場)から、帰宅するところである。右の二軒のどちらに行くか一軒は養護教諭、他は栄養士。実習が始まるまでは栄養士を考えていたが、今は養護教諭がいいと思い始めている。右下には無意識の池。宝石が光っている。右上の未来は花で飾られ、牧場主は未来を見つめている。栄養士として働く場合の雇用主らしき人物が見える。牧場内では馬が左、豚が右を向いているのも興味深い。

(10) L 1



男性講師 L の 1 回目、2002 年 5 月 21 日。
先生 L は自分の無意識に興味があり、調べられる

なら知りたいと思って箱庭を作りに来た。もう一人の先生と2人できて、Lが先に作った。Lに対する筆者の質問を聞いていたもう一人の先生は、防衛が生じてしまい単純な箱庭になったので、省略した。この箱庭は、Lの興味を端的に現している。鳥居の下にLのシンボル；熊のプーさんがいて、中央の砂山を覗き見ている。右端に少女、ベンチ。入り口の鳥居からは、光る玉や木の実が見える。無意識は山のように見えるのだろう。未知数であり、征服したい山のようなものもあるから。また、無意識は、興味津々のものでもあろう。だから、玉が光り、何らかの精神的稔りもある。もちろん、男性にとって女性はもっとも興味ある未知数である。

(11) M 1



S 中学2年生女子、Mの1回目、2002年7月5日。クライアントはダウン症の容貌であるが、ダウン症との診断は下されていないよう。人なつっこく、教職員に対しよく話しかけてくる。知的発達遅滞が見られ友人は少ない。砂遊びが好きで、進んで箱庭を作った。単純な繰り返しが見られる。そうした中でも、右上に見られる神聖な森は、心的バランスを保てることを示している。一方、初回であるからかもしれないが、動物と人間がいないことが、内界の孤独さを感じさせ、少し心配である。

事例(6)の Baum 検査

